《研究ノート》

情報機器(携帯電話)を使用した コミュニケーションと危険性に関する意識調査(1)

宮　森　孝　治

Ⅰ　はじめに

現在、わが国において携帯電話の普及は1億台突破し、１人１台の割合で所有していることになり、様々な場面で利用され、日常生活に欠かせないものとなっている。特に若者の利用に関しては、音声通話機能よりも、むしろメールやサイト検索等のインターネット機能のほうに価値を見出しているのではないかと思われる。実際に対面しての会話よりも、メールでのやり取りの方に偏っている傾向があり、コミュニケーションのあり方にも大きな影響を及ぼしている。また、携帯電話を持つことによって、誰もが様々な危険性にさらされているといえる。教育現場においても携帯電話の利用は多少なりの影響がある。今後の教育現場での積極的な利用が必要であるかどうかを検討するために、本学の学生について、携帯電話の利用状況の把握と、コミュニケーションや危険性についてどのように考えているかの調査を行うこととした。

Ⅱ　調査方法

１．調査期間

2006年12月初旬

２．調査対象

本学の幼児教育科１年次後期科目「教育情報処理演習」の履修者176人に対しアンケート調査を実施し、159人（女性146人、男性13人）の回答を得た。(回収率90.3%)

３．設問項目

(1)　所有状況に関する項目
- 性別、通学時の居住
- 初めての購入時期、購入時に気にした機能
- １ヶ月の費用、支払口座、所有の理由

(2)　利用状況に関する項目
- 利用頻度、主な利用内訳
- 主な電話の相手、主なメールの相手
- 主な利用サイト

(3)　メール利用に関する項目
- １日あたりのメール数
- 授業中のメール経験
- 電源OFFやマナーモードにする場面

(4)　携帯電話を持つことによる効果について
- 情報収集のしやすくなったか
- 友人が増えたか
- 人とのコミュニケーション増加の効果

(5)　携帯がなくなった時の影響について

(6)　知らない相手からの電話やスパムメールについて
- 知らない相手からの電話の経験とその対応
- スパムメールの経験とその対応について

(7)　紛失やトラブルに巻き込まれる危機意識について
- 紛失時に悪用されると思うか
- 暗証番号等のロックをかけているか
- 初対面の相手に電話番号やアドレスを教えることに抵抗があるか

Ⅲ　結果と考察

１．携帯電話の所有状況に関して

(1)　初めて所有した時期について

アンケートを実施した全員が携帯電話を所有しているとの回答を得た。また初めて所有した時期は表１－１に示すとおり、高校在学時と回答したものが61.1%、中学在学時が37.7%と続き、小学及び短大在学時がそれぞれ１人（0.6%）であった。このことは、所有開始時期が確実に低年齢になってきていることが分かる。

表１－１　初めて所有した時期

小学在学時	1 (0.6%)
中学在学時	60 (37.7%)
高校在学時	97 (61.1%)
短大在学時	1 (0.6%)

(2)　維持費用について

１ヶ月の費用は表１－２のとおりであり、半数の学生が「09千円まで」と答えており、９千円以内としてまとめると73.6%となり、このことから本学の学生の平均的な費用は９千円未満であることが分かる。９千円以上掛かっている学生が26.4%おり、その中でも高額な費用を支払っている学生がいる。１ヶ月の費用と支払口座（自分の口座と親の口座）との関係については有意とはいえない結果であったが、２万１千円以上の費用支払いが親の口座であるということは、自己管理が出来ていないことも考えられる。

表１－２　支払う口座別の１ヶ月の費用

費　　用	自分の口座	親の口座	計
03千円まで		3	3 (1.9%)
06千円まで	3	28	31 (19.7%)
09千円まで	9	71	80 (51.0%)
12千円まで	6	27	33 (21.0%)
15千円まで		6	6 (3.8%)
18千円まで			0 (0.0%)
21千円まで	2		2 (1.3%)
24千円まで		1	1 (0.6%)
27千円まで		1	1 (0.6%)
計	20 (12.7%)	137 (87.3%)	157

通学時の住居形態と６千円を境にした１ヶ月の費用の関係を検定した結果、表１－３，１－４に示すとおり、これらの関係は５%有意であり、自宅以外から通学している学生の方が費用増になっているといえる。

表１－３　通学時の住居と１カ月の費用の関係

費　　用	自　　宅	自宅以外
06千円以内	22	12
06千円以上	52	73

表１－４　通学時の住居と１カ月の費用の検定結果

独立性の検定　**：１%有意　*：５%有意			
x２乗値	自由度	P　値	判　定
5.73562203	1	0.0166	*

(3)　所有理由

携帯電話を所有している理由は、表１－５に示すとおり、「いつでも使えて便利」が40.6%、「必需品」が31.8%と順に多い結果を得た。このことは携帯電話が日常生活に密着し、欠かせないと感じている学生が多くいることがわかる。

表１－５　所有理由

いつでも使えて便利	40.6%
必需品である	31.8%
いろんな機能がある	11.9%
自分専用だから	7.5%
周りが持っている	3.5%

２．携帯電話の利用状況について

(1)　日常の利用頻度について

電話やメールを含めた利用頻度については、表２－１に示すとおり、約半分の学生が頻繁に利用しており、あまり利用しないという学生はかなり少ないという結果が得られた。このことからも日常生活に欠かせないものとなっていることが伺われる。

表２－１　電話･メールの利用頻度

よく利用する	51.6%
少し利用する	44.7%
あまり利用しない	1.3%

(2)　利用内容

携帯電話の利用内容については、表２－２に示すとおり、一番多いのは「メール」で、次は「電話」、「サイトの閲覧」の順であった。このことはある程度予想どおりであったが、「音楽を聴く」が多くなってきている傾向が出てきており、このことは携帯電話の購入時に機種を選ぶときの理由として「音楽」、「画面の大きさ」、「カメラ」が上位を占めていることからもわかる。

表２－２　利用内容多い順

	一番目	二番目
メール	90.6%	8.8%
サイト閲覧	5.7%	40.3%
電話	2.5%	42.1%
音楽を聴く	1.3%	8.2%
その他	0.0%	0.6%

(3)　電話でコミュニケーションする相手

電話で話す相手の多い順は、表２－３に示すとおり、一番目に多いと答えたのは「家族」42.5%、「友人」36.3%という結果が得られた。

二番目は逆転しているが、大きな差はないことが分かる。

表２－３　電話をかける相手の多い順

	一番目	二番目
家族	44.7%	39.6%
友人	35.8%	47.2%
学校・先生	0.0%	0.6%
アルバイト先	1.3%	2.5%
その他	17.0%	6.9%
回答無し	1.3%	3.1%

(4)　メールでコミュニケーションする相手

メールで通信する相手の多い順は、表２－４のとおり、一番目で多いのは友人（73.4%）で、二番目で多いのは家族（58.2%）という結果が得られ、前項の電話をかける相手の結果とは反対の結果がえられた。このことは、家族とは電話、友人とはメールというように自然と使い分けが出来ているのではと推測する。

表２－４　メールをする相手の多い順

	一番目	二番目
友人	73.0%	26.4%
家族	3.1%	58.5%
アルバイト先	0.0%	5.7%
学校・先生	0.0%	0.0%
その他	23.3%	5.0%
回答無し	0.6%	4.4%

(5)　主な利用サイトの内訳

携帯電話でのWebサイトの利用は、データ量が膨大となり費用面から敬遠されていた。しかし、ここ最近はどの携帯会社でも一定額で通信し放題の契約形態が出来るようになり、様々なサイトの利用が増加してきている。

主な利用サイトとしては、表２－５に示すとおり、「音楽ダウンロードサイト」が90.6%と圧倒的に多い結果が得られた。この理由としては、携帯を使って音楽を楽しむスタイルが定着し、音楽サイトから曲を直接ダウンロードし購入していることが多くなっていることが要因と考える。二番目は「趣味のサイト」が84%であり、この理由としては、旅行先や食事、映画などの情報検索や、自分のホームページを携帯サイトに開設し、友人同士が紹介しあっている状況も多くなってきていることが要因と考える。

表２－５　主な利用サイトの内訳（複数回答）

音楽ダウンロード	90.6%
趣味のサイト	84.3%
携帯会社サイト	15.1%
就職関連のサイト	4.4%
授業関連のサイト	3.8%
その他	34.0%

３．メール利用に関する項目

(1)　一日あたりのメール数

一日あたりのメール数は、表３－１に示すとおり、「10通まで」が36.5%と一番多く、「50通以上」が9人（5.8%）いるという結果であった。この結果については、常に携帯電話の画面を覗きこんで操作している学生が目立つことからも伺われる。これは本学の学生に限らず、現在の若者が、対面するコミュニケーションの煩わしさや苦手意識なのか、メールによるコミュニケーションを選択していることの現われではないか。

表３－１　一日あたりのメール数

10通まで	57 (36.5%)
20通まで	45 (28.8%)
30通まで	23 (14.7%)
40通まで	16 (10.3%)
50通まで	6 (3.8%)
50通以上	9 (5.8%)

(2)　授業中のメール経験

授業中の携帯電話は、実際調査結果によると表３－２に示すとおり、８割の学生がメールの着信または送信の経験があると答えている。この現状を踏まえて、全面的に禁止するか、有効に活用するかの検討する必要性があるのではないかと考える。

表３－２　授業中のメール経験

ある	128 (80.5%)
ない	30 (18.9%)
回答無し	1 (0.6%)

(3)　電源OFFまたはマナーモードについて

携帯電話を利用するにあたって、電源OFFやマナーモードにする場所または場面について質問してところ表３－３に示す結果が得られた。結果として、「授業中」「映画館等公共施設」「病院」の順に割合が多かったが、それ以外の項目は現在の自分に該当しないということで、少な

い結果であった。

表３－３　電源OFFまたはマナーモードの場所および場面（複数回答）

授業中	91.2%
映画館等公共施設	85.5%
病院	83.6%
アルバイト中	49.1%
混んだ公共交通機関	45.9%
車運転中	10.1%

４．携帯を持つことによる効果について

携帯電話を所有することによって得られる効果について、「情報収集のしやすさ」「友人の増加」「人とのコミュニケーション増加の効果」を観点に調査した。

(1)　情報収集のしやすさ

携帯を持つことによって、情報収集がしやすくなったかという質問に対して、表４－１に示すとおり、「しやすくなった」が95%との結果が得られた。このことは必要な情報収集の手段が携帯電話であることが伺える。

表４－１　情報収集のしやすさ

しやすくなった	151 (95.0%)
変わらない	8 (5.0%)
ならない	0 (0.0%)

(2)　持つことによる友人増加

携帯電話を所有することによって友人が増えたかという質問に対して、表４－２のとおり、「増えた」が70.4%という結果が得られた。ほとんどの若者が所有している状況で、お互いのコミュニケーションとして、メールが多く利用されていることが大きな要因ではないかと推測する。

表４－２　友人の増加

増えた	112 (70.4%)
変わらない	46 (28.9%)
増えない	1 (0.6%)

(3)　携帯電話を持つことによる人とのコミュニケーション増加の効果

携帯電話を持つことによってコミュニケーション増加の効果があるかという質問に対して、表４－３に示すとおりの結果が得られた。「友人」に関しては「増えた」が89.3%と圧倒的に多く、かなり有効な手段であることがわかる。「家族」関しては「増えた」と「変わらない」が約半数であるが、持つことによって一定の効果があることが推測できる。「先生」に関しては「変わらない」が63.5%ということで効果としてはあまり関係が無いことがわかる。

表４－３　コミュニケーション増加の効果

	友人	家族	先生
効果ある	89.3%	54.1%	15.7%
変わらない	10.7%	43.4%	63.5%
効果ない	0.0%	1.3%	18.9%

５．知らない相手からの電話やスパムメール受信の対応

(1)　知らない相手からの電話の有無と対応

知らない相手からの電話を受けたことがあると答えた学生は95.6%（152人）であり、ほとんどの学生が経験していた。

その電話にどう対応したかの質問に対し、表５－１に示すとおり、「無視する」と「様子を見る」どちらも約半数の結果が得られた。知らない番号からの電話に対し、犯罪等に巻き込まれたくないという慎重さが表われているのではないかと思われる。このことは学生に緊急連絡しようとした場合、全くでないか、何回か試みて、ようやく繋がる状況であることからも分かる。

表５－１　知らない相手からの電話の対応

すぐにでる	5 (3.3%)
全部無視	79 (52.0%)
様子を見る	67 (44.1%)
回答無し	1 (0.7%)

(2)　スパムメール受信の有無と対応

パソコン使用においてもスパムメールは厄介なもので、中には危険性が伴っている内容が多くなっている。携帯でのスパムメールの状況がどうなっているかを調べた結果、表５－２に示すとおりの結果が得られた。「現在も頻繁にある」と「現在もたまにある」を合わせて12.7%と意外と少ないが、スパムメールによってメールアドレスを数回変更した学生が半数ほどいて、「以前は頻繁にあった」と「以前は少しあった」を加えると54.1%となり、全体の約半数の学生がスパムメールを受信していたことが推測される。

表５－２　スパムメールの受信経験

現在も頻繁にある	1 (0.6%)
現在もたまにある	19 (12.1%)
以前は頻繁にあった	18 (11.5%)
以前は少しあった	47 (29.9%)
現在も以前も全く無い	59 (37.6%)
回答無し	15 (8.9%)

スパムメールを受信した時の対応とメール履歴の処理は、表５－３に示すとおり、「すぐ内容をみる」と「数回内容をみる」を合わせて６割近くの学生は、有害な情報を見る危険性があるという結果が得られた。また履歴を完全に消し去るのは約65%で、残りの35%学生は履歴に残っている可能性があり、危険サイトにアクセスする危うさが潜在化していることになる。

表５－３　スパムメールの対応と履歴の処理

対応	メール履歴の処理			計
	全部削除	部分削除	削除無し	
すぐ内容をみる	21	6	15	42 (27.6%)
数回内容をみる	28	12	11	51 (33.6%)
全部無視	49	4	6	59 (38.8%)
計	98	22	32	152

６．携帯電話が無くなったときの影響

携帯電話が何らかの理由で無くなった場合の日常生活への影響は、表６－１に示すとおり、「大いに影響がある」が56.6%、「少し影響がある」が40.9%という結果が得られた。ほとんどの学生にとって携帯電話は日常生活に欠かせないほど密着して使われており、無くなった場合に、友人や家族に連絡が出来なくなるということなど、精神的な不安等が大きな要因ではないかと思われる。

表６－１　携帯電話が無くなった時の影響

大いに影響ある	90 (56.6%)
少し影響ある	65 (40.9%)
影響ない	2 (1.3%)
回答無し	2 (1.3%)

７．紛失やトラブルに巻き込まれる危機意識について

(1)　紛失時の犯罪に利用される危険性の認識

携帯電話を紛失した、あるいは盗難にあった後に、それが犯罪に利用される可能性があるという認識があるかどうか調査し表７－１の結果が得られた。半数が「大いに思う」と答えており、「少し思う」を加えるとほとんどの学生が危険性を認識している。ところが、暗証番号等のロックを掛けている学生は34%であり、危険性を認識しているが、対策を行っていない学生が多い傾向であることが分かる。

表７－１　紛失時，犯罪に利用の危険性認識と対策

危険性認識	暗証番号などのロック			計
	掛けている	掛けていない	不　明	
思わない	0	5	0	5 (3%)
少し思う	32	37	3	72 (45%)
大いに思う	22	53	7	82 (51%)
計	54 (34%)	95 (60%)	10 (6%)	159

(2)　初対面の相手に携帯電話番号やメールアドレスを教えることについて

表７－２に示すとおり、初対面の相手に電話番号を教えることについて、「大いに抵抗がある」と「少し抵抗がある」を合わせて73%であった。これに対し、メールアドレスを教えることについては、「大いに抵抗ある」と「少し抵抗がある」を合わせて54.7%であり、電話番号を教えるよりも抵抗感が少ないのでないか。このことは「大いに抵抗がある」と「少し抵抗がある」を合わせたもので検定したところ、電話番号またはメールアドレスを教えることと、抵抗があるかないかの関係は、表７－３に示すとおり、有意（１%）であるということからも明らかであった。

この要因としては、何らかのトラブルに巻き込まれ場合、電話番号を知られた場合、簡単に番号が変更できないことなどもあり、危険性があり、その点メールアドレスの場合は、簡単に変更ができるということで、約半数の学生が「全く抵抗がない」と答えたと考えられる。

表７－２　初対面の相手に番号やメールアドレスを教える

	電話番号を教える	メールアドレスを教える
大いに抵抗ある	23 (14.5%)	8 (5.0%)
少し抵抗ある	93 (58.5%)	79 (49.7%)
全く抵抗ない	42 (26.4%)	71 (44.7%)

表７－３　抵抗の有無と番号･メールアドレスの検定結果

※「大いに抵抗ある」と「少し抵抗がある」をまとめた検定
独立性の検定　**：１%有意　*：５%有意

x２乗値	自由度	P　値	判　定
11.58533502	1	0.0007	**

Ⅳ　まとめ

本調査の結果、在学中の学生の携帯電話の使用状況やコミュニケーションの現状や危険性の認識について有効な結果が得られた。

初めて所有した時期として、ほとんどが高校生で所有し、中学生でもかなりの割合であった。数年前と比較し確実に若年層の所有が顕著になっている。また維持する費用について、７割近くが９千円以内であるが、２万円以上と高額な支払いをしている学生もいる状況が分かった。

携帯電話を持つことによって、友人関係についてはかなり有効であり、情報収集のしやすさや利便性を大多数が感じているという結果が得られた。しかし、一日あたりのメール数の多い学生も多く、実際に会って話をするよりもメールで済ませる傾向に、社会に出た時の会話力やコミュニケーションが上手くいかないで、様々な問題が生じるのではないかという危惧がある。また出会い系などのスパムメールの受信経験も多く、犯罪に巻き込まれる危険性が増してきている。

これらのことから、家庭では携帯電話を持たせる場合、費用面での利用方法や、危険性を避けるルールを決め、自己管理が出来るような指導が必要である。また、本学においても、マナーや危険性についての教育を徹底するとともに、ほとんどの学生が所有し、コミュニケーションのツールとして欠かせない現状を踏まえ、携帯電話の即時性と利便性という特性を積極的に活用することが必要と感じる。

今回はこのような調査結果が得られたが、次回は、より具体的な利用方法についての調査を行い、学内の個別連絡や履修教科連絡等の教育利用のための具体的な方策を検討したい。

参考文献

[1] 友永昌治、宮崎智絵　ケータイとコミュニケーション　(2002) 情報処理教育研究集会講演論文集
[2] 鈴木愛　携帯メールとシグナルのコミュニケーション　(2003) 情報文化学会講演予稿集